(1)

峠三吉

II. 壁史

ミユツ！
金市が
焚きつめられた
マグネシユームのなかで
影絵のように崩れる。
音ではない

それは
フワリと
投げ出された意識、
埋められる瞬間の
とおい
おのれ。

千万のガラスの刺、
鉄より重い木材の堆積、
どすりとした壁土がとびめをさし、

(1)

2)

そして
崩れた瓦屋根のいろかり
道をふさぎ
電線をからませ
低くなみうつ
いろかり
人のいぬ
何里四方かの
いろかり

急に立ち上った山脈の
焦げたすりばちの底に
つぶれたヒロシマから
なんという
盛りあがり、逆巻き、まくれ返し
たちのぼる
雲・
雲・
雲・
はるか天頂で真紅の噴火

赤、橙、紫、
光、撥ちあい
焔、爆発し
吹きつける煙の
地殻から気圏へ
沸騰する
大氣。

ウラニユームひニ三五号は
予定されたヒロシマの
上空五百米に
強烈な太陽を出現させた。
計画どおり
午前八時十五分は
にんげんを
市の中心部に
かき集めて、
ヒロシマは
もう見えない、

うす暗い煙の底
焔の陰毛が
這いまわり
にんげんの
脱がされた皮膚をなめ
黒い雨粒が
同族をよぶ唇をふさぐ
列、
列、
列、

幽霊の行列。
巣をこわされた蟻のように
市外への
道を埋めて
両手をまえに
のろのろと
しばらくつづく
かつて人間だった
ものの列。

空も地も喪はれた
異臭の空間を七つに潜ってながれる
ゆるい水の移動、
ごつ〳〵と
ぶよ〳〵と
茫漠につづくものが
湾口の
多多につきあたる、

〈あ、おれたちは
魚ではないから
黙ってはらを返すわけにはゆかぬ
ビキニ環礁が嘆き上げた
何万トンかの海水を映して
豚、
さる、
羊、
実験動物たちの
きよとんとした眼・眼・眼・眼・〉

6)

日が照る、
雨が降ると、
ひろいひろい瓦礫の三里四方
白骨と練瓦礫をならして
たしかに
三尺ばかり高くなった七日目。
死者二十四万七千
行方不明一万四千
負傷三万八千

原爆遺跡ちんれつ所にてるかる
焼けた石。
溶けた瓦。
べしゃげたビールビン。
そして埃をかぶった
観光ホテルの都市計画パンフ。
しかし
一九五〇年
けうも炎えあがる雲、

7)

それを揃め

ふわりと浮遊する

たしかにあれは

白点三つ、

アあれが

地球儀の裏から

芝浦でひるをつけた

原爆効果測定器の落下傘、

おれたち

死者の網膜から

消えることのない

あのあさのうつかさんが

ふうわりと

雲のかげで

あそんでいる。